

3.2 岡崎地区

（1）琵琶湖疏水開削と岡崎地区

農耕地帯であった岡崎地区【図-4】の都市的な開発には白川の治水という課題があったが、琵琶湖疏水開削は白川との交差・接続部において山科地区では一切用いなかった合流という処理を行った。その背景には、地形の性質、舟溜の沈砂効果、白川の治水等、多くの意義が存在したと推察できる。

（2）遊船事業と都市形成

南禅寺舟溜、夷川舟溜を両端とする鴨東運河の舟運機能は建設当初、本来の舟運ではなく遊船事業によって活用された。明治23年（1890）遊船業が許可された後、西の嵐山に対し、東の琵琶湖疏水が新しい舟遊びの新名所として脚光を浴びることとなった。

明治28年の内国勧業博覧会【図-5】は疏水ブームに拍車をかけ、この年、約30万人の人々が琵琶湖疏水の遊船を楽しみ、明治30年代まで安定した乗客数があった。

鴨東運河における遊船事業は東山岡崎地区における水面の観光的利用の可能性を示すと共に、岡崎地区の集客能力の高さを示し、現代へと続く文化施設集積地区としての都市開発の基礎をつくったと言える。

3.3 祇園白川地区

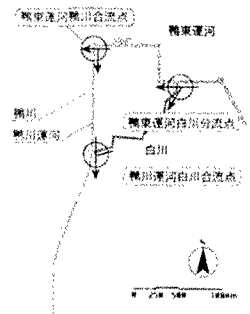
（1）白川の流路変遷

白川の流路は、鎌倉・室町時代までは現在のように一筋の流れではなく、下流にて本流と支流に分かれていたが、承応2年（1653）頃には白川本流が消滅し、

流れが一派となった。祇園白川地区は、寛文新堤の築造（1661～73年）以降、それまで鴨川の氾濫原だった地域が河原と明確に区分され、江戸中期には参詣人目当ての水茶屋や遊里として繁栄すると共に【図-6】白川の水は祇園白川界隈の街に張りめぐらされ、重要な生活用水として活用された。【図-7】しかし白川は浸食作用の激しい河川であり、出水時には水害の危険を有していたと推察される。

（2）琵琶湖疏水と祇園白川のアメニティ

白川の治水のみならず琵琶湖疏水の流量受け入れ先としても祇園白川への流量増加は何度か計画されたが、その度に計画が回避されている。祇園白川界隈では人々の生活用水として定量的な水が必要とされ、またお茶屋や料理屋でも白川のせせらぎは、京の風物詩として景観の一部を構成していたことから、水位や水量調節の必要性があったことが推測される。このような人々の生活の豊かさや楽しさを守るために樋門による分流・合流により白川の水をコントロール【図-8】した琵琶湖疏水は、祇園白川地区の治水、利水、親水の全てを含めたアメニティを支え、都市形成に寄与していたと言える。



【図-8】 祇園白川における水のコントロール

4. 結論

研究成果として、以下の結論をまとめた。

- ・琵琶湖疏水建設以前の通水計画を分析することにより、琵琶湖から京都へ新舟運路を開削する際に克服しなければならなかった4つの技術的課題（延長距離、勾配、峠の克服、既存の河川や水路との接続）を抽出した。
- ・第一琵琶湖疏水計画における舟運機能と灌漑、水力利用の影響を比較し、舟運機能と京都市内の琵琶湖疏水のルートについて考察した。
- ・山科地区・深草地区といった都市間に位置する農耕地帯では、琵琶湖疏水は他の河川を全て潜流させ、流入を拒んだ。
- ・岡崎地区では、鴨東運河を中心に隆盛を誇った遊船事業が同地区の観光地としての価値を示し、現代に至る文化施設集積地区としての基盤をつくった。
- ・琵琶湖疏水は白川の治水に大きく関与しており、特に祇園白川地区では水をコントロールすることにより、その都市形成に大きく寄与した。

主要参考文献

訂正琵琶湖疏水要誌(全)、京都市参事会、1896.7.5
京都市電気局：琵琶湖疏水及水力使用事業、1940.3.31
京都新聞社編、京都市水道局：琵琶湖疏水の100年、1990.4.9
京都市水道局琵琶湖疏水事務所に提供いただいた各種資料



【図-3】 山科地区の琵琶湖疏水（『京都百年パノラマ館』より）



【図-4】 開削当時の岡崎地区（『琵琶湖疏水及び水力使用事業』より）



【図-5】 第四回内国勧業博覧会（『京都の歴史と文化』）



【図-6】 祇園白川 大和橋（『京都慕情』より）



【図-7】 「祇園町絵図」（『京都古地図散歩』より）